The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カトリック教会による在日ブラジル人信徒への対応 ：『カトリック新聞』の記事を中心にして
Author(s)	星野, 壮
Citation	宗教と社会貢献. 2016, 6(2), p. 23-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57817
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論文

カトリック教会による在日ブラジル人信徒への対応

―『カトリック新聞』の記事を中心にして―

星野　壮*

The Responses to Brazilian Followers by Catholic Church(es) in Japan Mainly Focused on the Articles of "*The Catholic Weekly of Japan*"

Hoshino So

論文要旨

本論文では日本にあるカトリック教会側から在日ブラジル人に対してどのような司牧と支援が行われてきたのかについて論じる。カトリックは在日ブラジル人の増加に伴って、早い時期から司牧・支援を、主に小教区レベルで進めてきた。特に長崎巡礼や移民 100 周年祭といったイベントを通じて、在日ブラジル人が日本の教会へ定着するように努めてきた。また、フェスタ・ジュニーナやカリスマ刷新運動といった在日ブラジル人側からの自発的運動に対して、苦慮しつつも対処することを通じて、在日ブラジル人共同体の成長を促してきた。リーマン・ショックを経て在日ブラジル人信徒は減少しているものの、司牧と支援は継続されている。
キーワード　在日ブラジル人、カトリック教会

This paper discusses how the Catholic Church in Japan provides pastoral care and support to immigrants from Brazil. From the beginning of the increase in the numbers of these immigrants individual Catholic churches have ministered to their needs at the parish level. In particular, the Church has used events such as the Nagasaki Pilgrimage and the 100th Anniversary of Immigration Festival to deepen ties between Brazilians in Japan and their local churches. In the Church's struggle to encourage unity among the Brazilian community through the Church, its centrality has been challenged by immigrant-planned events such as the Festa Junina and Catholic Charismatic Renewal. Since the economic depression and financial crisis caused by the Bankruptcy of Lehman Brothers, the Brazilian immigrant population of Japan has decreased, but the Church continues to provide pastoral care and support.
Keywords: Brazilians in Japan, Catholic Church(es) in Japan

* 大正大学・非常勤講師・YFA40223@nifty.com

1. はじめに

筆者を含め「在日ブラジル人が日本のカトリック教会とどのような関係を取り結ぶのか」について考察してきた先行研究から、1 つの共通性を見てとることができる。それは「主眼を在日ブラジル人側においてきた」ことである。たとえば彼／彼女らが、日本においてどのような信徒共同体を作るのか［星野 2011］、自身のルーツ（の一部）が存在する日本についてどのように考えるのか［Matsue 2006; Quero 2007］、などに焦点が当てられてきたのである。また在日ブラジル人の「宗教市場」において、なぜカトリック教会は劣勢な状況に置かれているのかについても検討されてきた［山田 2010; Shoji 2008］。

一方、日本にて宗教運動に参画するブラジル人たちに対して、日本人側（教団・個人）からの対応について注目した研究としては、渡辺雅子と樋口直人のものなどが挙げられよう［渡辺 2001; 渡辺・田島・石渡 1999; 樋口 1998］。ブラジルにおける日系新宗教の展開について詳細な検討を加えてきた渡辺、そして渡辺を中心とするメンバーは、新宗教教団による在日ブラジル人に対する対応を、新宗教における組織形態についての議論を参照し、比較している。在日ブラジル人研究を牽引してきた樋口は、新宗教側による在日ブラジル人への対応を概括し、移民研究における宗教の重要性を強調し、その必要性を提唱している。

さて、両者ともに新宗教について取り上げた訳だが、管見のかぎり新宗教以外の宗教において、日本人側から在日ブラジル人になされてきた対応について論じたもの、また日本人側からのまなざし方について調査分析した先行研究は見当たらない。このような状況を鑑みて、本稿では先行研究を踏まえつつも、1990 年以降多くのブラジル人を「新たな信徒」として迎えることになった日本におけるカトリック教会を事例として、その対応の特徴を記述することを目的とする。

具体的には 1990 年から 2014 年までに発刊された『カトリック新聞(1)』（以下『新聞』とする）や「在日ブラジル人司牧者と協力者の集い」に関する資料(2)、1999 年から現在にいたるまで複数教会を横断して支援・司牧を行

ってきた司牧担当者たち（主にシスターA とシスターB[3]）への聞き取り内容を中心にして、さらに筆者のこれまでの調査などもふまえながら、在日ブラジル人たちに対して、カトリック教会からどのような支援・司牧が行われたかを明らかにする。特に日本の教会に適応させるための取り組みや、エスニックな運動に対しての対処法などを重点的に記述する。

2. カトリック教会における外国人司牧・支援システムの概略

まずは、日本のカトリック教会がどのような組織形態を持っていて、その組織の中にあるどのようなセクションが外国人司牧・支援に関わっているのかを概観していこう。

2016 年 7 月現在、日本のカトリック教会は 16 の教区に分かれており、教区長はいずれも日本人司教が任命されている。このうち東京、大阪、長崎の教区長には（主都）大司教が任命されている。各教区ともバチカン本部の下に設けられているという形式を取るものの、日本にあるカトリック教会全てを統括する包括団体も存在する。それがカトリック中央協議会ということになる。

日本国内に存在するすべてのカトリック教会（小教区）は、いずれかの教区に属しており、中央協議会や教区の意向を受けつつも、小教区独自の事情に合わせて各委員会を組織し、活動を行っている。

さて、中央協議会内にて外国人司牧・支援を担当する部署としては、「日本カトリック難民移住移動者委員会（Catholic Commission of Japan for Migrants, Refugees and People on the Move、略称 J-CaRM、以後「難民移住移動者委員会」）」が組織され、他の中央協議会内の委員会と同様に、委員長には司教が就任している[4]。そして教区ごとに、その窓口として難民や移住移動者の司牧・支援を担当するセクションが設けられている[5]。

難民移住者委員会公式サイト[6]によれば、活動目的は「民族的排他主義が根強い日本社会で、多くの難民・移住者・移動者の人権や“いのち”の尊厳が侵害されている。本委員会は福音に基づき、多民族・多国籍・多文化共生社会をめざし、すべての人が神の子として、平等で基本的人権が尊重され、相互の文化・民族性を尊敬し、ともに兄弟・姉妹として生きること

のできる社会の実現のために働く。そのために難民・移住者・移動者に対する各教区の司牧活動に協働する」とある。また、難民移住移動者委員会は、日本の教区や教会における外国人司牧・支援に関わるばかりではない。教皇庁に設置されている移住移動者司牧評議会の下部組織としての側面も持っており、世界各地のカトリック教会との連携が可能となっている。

さて、日本国内に話を戻そう。本稿の結論を一部先取りすることになるが、在日ブラジル人信徒への対応・方針は教会・教区ごとによって異なり、実際は最前線にて活動している各教会の司牧者たちが、主に教区単位でその経験を共有・蓄積し、方策を練る、という作業を通じて対応してきた。本稿で取り上げる司牧者たちも、教会と教区を往還しながら対応してきた人間ということになる。

3. 1990 年代からなされていた司牧・支援

「定住者」資格などの新設を含んだ改正入管法が 1990 年 6 月から施行されたことにより、日本国内に流入する日系を中心とした在日ブラジル人が大幅に増加していく。カトリック教会は在日ブラジル人増加について、90 年代初頭からきわめて敏感であったように思える。

たとえば難民移住移動者委員会の前身にあたる「日本カトリック国際協力委員会」では、法律施行前後の段階で、すでに問題として「日本語を話せない、読めない、理解できない。習慣の違い、アルコール依存などの問題がある。日本語教室などは各地で始められている。静岡県で外国人数が増加し、中でも日系人の増加が目立っている」といった情報がシェアされている(7)。

そして「新たな信徒」を迎えることになった現場では、初期から支援イベントなどを行っていたことも明らかになっている。たとえば、『新聞』1990 年 9 月 16 日号によれば、愛知県内の教会で「1990 年 8 月 7 日、中南米から来日した日系労働者たちの集いが名古屋教区カトリック国際協力委員会主催で開かれた(8)」という記事がある。このイベントには日系ブラジル人約 60 人、ペルー人 20 人が参加した。またイベントにはカトリック名古屋教区関係者だけではなく、仏教者たちによる支援グループも参加しており、ミ

サと法要が営まれている。イベントではいわゆる日本とラテンアメリカの食事を紹介、といった互いの「文化[9]」紹介のレベルをこえて、就労にかかわる問題、ビザ種目の変更をどのようにすればいいか、といった日本社会における現実的な生存戦略についてもブラジル人から質問が寄せられている。

一般的に外国人支援としてもっとも考えられるのが、言語に関する問題への支援ということになるだろう。すなわち教会における日本語教室の開催も報告されている。『新聞』1991 年 12 月 15 日号では、すでに群馬県内のカトリック教会では、教会敷地内の保育園にて日本語教室（3 クラス）が行われていることが書かれている。ここからは、まだポルトガル語ミサが行われていないのにもかかわらず多数のブラジル人がミサに参加していることや、日本人信徒たちが教会内部に福祉部を設けて、言語以外にも、住宅、医療など生活全般にわたって対応していることが明らかになっている[10]。

他にも「聖職者・信徒たちによる支援活動（交流・医療・言語など）[11]」が静岡、大阪、愛知、神奈川の各県でブラジル人向けに行われていることが分かる。

この時期から在日ブラジル人を含め、在日外国人司牧・支援に携わってきた K 神父[12]は、筆者の「なぜこの時期から行動できたのか？」という問いに、以下のように答えた。

> 私が司祭として叙階された後、カナダにて研修を受けたのですが、それがちょうどベトナム戦争が終わったばかりの 1976 年でした。実はベトナム戦争について、支援を熱心にやっていたのがカナダだそうです。オタワとトロントにいたのですが、当地のイエズス会がさまざまな支援に従事し、私はそこに寄宿していたので、参加することになりました。ベトナム難民の他にも、フランス語の関係でカンボジア難民もいたし、ピノチェト政権の関係でチリからの難民もいた。そういった流れの中に自分がいて、1981 年に帰国した後、その 2 年後には、日本で難民他外国人支援の活動をはじめ、組織を立ち上げることになりました。ちょうどその時、私が東海地域でも、特に在日（コリアン）が多い地域で司牧をしていたこともありましたかね。当時の相談内容は、医療、生活の借金の問題。それから教育の問題、福祉の問題。そ

ういった話が多かったですね。

司牧者の中には海外研修などで、海外での司牧・支援に携わった経験を持つものがいる。また海外での司牧・支援経験がなくとも、日本でもすでにインドシナ難民や在日コリアン、そしてフィリピン人女性らに信徒がおり、そのような外国人マイノリティの司牧・支援に関わった経験をもっている人物が存在することも指摘できるだろう。そして日本におけるインドシナ難民やフィリピン人女性らに対して、手厚い支援を施したセクターの 1 つとしてカトリック教会があり、そこでの経験が継承されて、他の外国人支援に接続していった、といった指摘もできるだろう。

それでは、早期から在日ブラジル人の増加を認識していた中央協議会内では、一体どのような会議が持たれていたのだろうか。難民移住移動者委員会の前身である国際協力委員会、また指導者たる司教たちが集まる司教総会、さらには他の委員会にて、すでにこの時期から在日ブラジル人（やその他のラテンアメリカ諸国からの外国人）と彼／彼女らへの司牧・支援に必要性を認め、話し合いをもっていることが窺える。

そのような会議においては、①在日ブラジル人におけるカトリック要理知識の欠如や秘跡に預からない人びとの存在、②現場である教会における聖職者・信徒の献身ぶり、③スペイン語話者の司牧者、特にポルトガル語も話せる司牧者たちの疲労への懸念、④（司牧・支援に）積極的な司牧者が異動した後の不在をどのように埋めるか、といった話題が複数回話し合われたことが、『新聞』紙上にのぼっている。そのような委員会の一部は浜松など、実際に在日ブラジル人の流入初期からの集住地でも行われている(13)。すなわち、中央協議会でも、すでにこの時期から現場たる教会への負担増と、司牧者の必要性は話し合われていたのである。また各教区レベルでも話し合いは持たれていた可能性も高い(14)。

結果として、このような動きが、90 年代相次いだ教区単位で外国人司牧・支援を行うセクションの設置につながっていったと考えられる。たとえば 1990 年 4 月には東京教区にて CTIC（「カトリック東京国際センター」の略、発足当初は TIPC）、1994 年にはさいたま教区（当時浦和教区）でオープンハウスという名前で、教区単位の組織が発足している。名古屋教区でもこの時期に「共の会」という支援組織が設けられている(15)。

上記のような組織も、結果的に小教区の司牧者や信徒たちが、各小教区での経験をもとにして、シェアしながら施策を練り、活動を行う。しかしながら、当初から（スタッフたちとの個人的な繋がりのない）小教区との連携が十全であったわけではないようだ[16]。

4. 2000 年～2008 年前半までの概況

急激な在日ブラジル人の増加がはじまって 10 年、2000 年代における『新聞』の記事を一瞥しながら分かることは、まず在日ブラジル人を取り扱う記事が増加しているという事実である。中央協議会や教区の対応、教会単位における現場の実情、そして在日ブラジル人信徒自身の声、といった関連する記事を年代ごとに集計すると、1990 年から 1999 年にかけては 25 件だけなのに対して、2000 年から 2009 年までの間には 97 件もの記事が書かれている。

この時期の『新聞』から判明することの 1 つとして、日本のカトリック教会にとって外国人信徒はなくてはならぬ存在である、と考える聖職者たちの存在をあげることができよう。たとえば『新聞』2001 年 3 月 25 日号では、「外国籍信徒の統計」と題して、全国・各教区での外国人信徒の概算結果（2000 年）が掲載されている。それによると、全国の日本人カトリック信徒総数が 441,906 人なのに対して、外国人信徒が 406,972 人としており、同数に近づいていることが指摘される。在日ブラジル人信徒に限っていえば、192,999 人であり、外国人信徒数のトップに立っている。教区単位で考えると、横浜教区、名古屋教区、浦和（現さいたま）教区、京都教区では、すでに外国人信徒が日本人信徒の数を上回っている、としている。また 2005 年 3 月 6 日号になると、「信徒 100 万人時代の到来」として、日本人信徒と外国人信徒をあわせて「日本のカトリック教会の信徒」として位置づけようとしていることを、より鮮明に打ち出した記事なども見られる[17]。

このような記事から読み取れることとは、集住地、現場の教会における外国人信徒、特に本論での対象である在日ブラジル人信徒のプレゼンスの増大という事実と、その事実に際して、少子高齢化が進み、カトリック教会の日本人信徒にも高齢化と減少の危機に立たされていることへ危機感を

覚える者たちの存在である。このような窮状において、在日外国人信徒は「恵み」であるとする聖職者たちが存在しても、何ら不思議なことではない。そのような聖職者の代表と目されるのが、この時期にカトリック難民移住移動者委員会委員長の任にあった、当時の浦和教区司教・谷大二であろう［谷ほか 2008］。

このような傾向を踏まえた上で、この時期の『新聞』を概観すると、小教区レベルで 90 年代から行われてきた司牧・支援の数々が、各地で継続されている事実を指摘できる。たとえば『新聞』2004 年 7 月 25 日号を見てみると、前述の K 神父が当時主任司祭として赴任していた愛知県下の小教区において、日曜日の午後はすべて在留外国人への司牧・支援に当てられていたこと、そしてその対象者の多くが在日ブラジル人であったことが判明する（もちろんこれは K 神父の言質とも一致する）。また『新聞』2004 年 10 月 3 日号では、静岡県下の教会で 1995 年からブラジル人神父によって日本人信徒とブラジル人信徒の協働が呼びかけられ、ブラジル人路上生活者への生活支援が続けられていることが掲載されている。

また中央協議会や教区レベルでも諸会議が引き続き行われている。たとえば 2000 年 9 月 15 日、16 日には、（バチカン本部の）教皇庁移住・移動者司牧評議会議長の任にあった濱尾文郎大司教らが外国人支援についてのシンポジウムを行い、内部での議論が進んでいることをアピールしつつ「高齢化しつつあるカトリック教会の現状を鑑みれば、外国人信徒の存在は軽視されるべきではない」として真剣に考えることを訴えている(18)。また、キリスト教他教派との外国人支援の面において連携する場である「外登法と取り組む全国キリスト教連絡協議会(19)」での協議を通じて、日本における外国人の地位向上を内外に対して訴えることも行っている(20)。

このような中央協議会や教区による努力が結実したのかどうかはさておき、この時期は、前述した教区レベルでの外国人支援・司牧の担当セクションの取り組みが各小教区へと、徐々に浸透していった時期でもあったという。

シスターA、シスターB ともに、この理由として「上からいきなり与えられた組織」に対する小教区からの抵抗感が低下してきたことを挙げている。またポルトガル語による司牧を行える人材が各教会にいるわけではないが、それらの限られた人材はほぼ例外なく教区の司牧・支援セクションに関わ

っている。よって集住地の各小教区はこれらのセクションと連携しなければ、外国人信徒への対応がままならない。そのような現実的な事情からも、これらのセクションの有用性が認められてきたのだろう、とシスターA、Bともに言う。このような状況はまた、少しずつ上から、つまり教区単位での外国人司牧・支援に向けた集団的な施策を講じやすくなったことも意味する。

また、そのポルトガル語による司牧が可能な聖職者たちが、この時期に増加したことも見逃せない。ある聖職者は日本の教区レベルの要請や、修道会ネットワークを通じて来日してきた。日本の聖職者たちも、ある聖職者は叙階後すぐさま、また日本での司牧経験豊富な司祭も、ブラジルに行き、現地でポルトガル語での司牧を経験して帰国して、在日ブラジル人の司牧担当となった(21)。このような努力の結果、ポルトガル語で司牧可能な司牧者数は、2000 年には 19 人であったが、2008 年には 31 人に増加した(22)。

教区単位における施策の展開が可能となった。それに関連して司牧者の数が増えた。これらの変化は、何を生み出したのか。それは在日ブラジル人信徒の増加、そして各教会でのブラジル人信徒共同体の成長という事実である。当然のことであるが、ポルトガル語での司牧可能な聖職者の増加は、そのままポルトガル語のミサの増加に繋がる。自分たちの母語でのミサが、今まで地域で月に一回のみポルトガル語ミサが開かれていたところが、地域の各教会で月に 2 回、場所によっては毎週開かれるようになる。このような状況が在日ブラジル人にとって歓迎されるものであったことは、疑いようがない。実際に筆者の行ったフィールドワークでもこの時期の信徒が増加したことが明らかになっている。ちなみにブラジルではカトリック信徒を、教会・信徒共同体へのコミットメントの度合いによって「実践者」と「非実践者」といったカテゴリに分類するが、この時期は双方共に増加した時期にあたる［星野 2011］。

司牧者の増加は、日本の人材がブラジルでの司牧を経験するためにブラジルに行くだけではない。海外、特にブラジルのカトリック教会とのコネクションは、日本における司牧のために動員された。たとえばこの時期、ブラジル・カトリック教会司教団の中にある、在外ブラジル人司牧担当者との（情報交換や人材協力などの）交渉が頻繁になされていたことが分かっている(23)。

5. 「日本の教会」の成員へ—長崎巡礼と移民 100 周年祭—

さて、司牧者たちはどのようにして日本におけるブラジル人司牧を進めようとしていたのか。それを説明する上で重要な示唆を与える事例が２つほど存在する。双方ともシスターA が発案・企画に参与し、2000 年代後半になって実行に移された。

1 つ目の事例が、「外国人（主に在日ブラジル人）子弟の長崎巡礼（2007 年）」である。戦国時代、有力武将たちがカトリックに帰依して以降、長崎は日本のカトリック信仰の中心地であった。織豊時代後期の長崎西坂での 26 聖人の殉教、徳川政権下での天草・島原の乱などを経た後も、長崎では信仰を守ったカクレキリシタンたちが存在した。また幕末から明治初期の弾圧、そして太平洋戦争末期には原爆を投下された。それらすべてを乗り越えて、長崎は現在も日本のカトリック信仰の歴史を伝える場所である［長崎巡礼センター編 2008］。

実はシスターA 自身、長崎五島列島のカトリック家庭に生まれ、ブラジルに移住した経験を持つ。彼女は以下のようにいう。

> 全国のブラジル人コミュニティに声をかけて、とにかくいろんな所から、長崎に集合しました。ブラジル人コミュニティの青年たちを対象に、日本のカトリック教会の歴史っていうものを、迫害をこえて、信仰を残してきた人がいたんだよ、ということをはっきり伝えたかったのです。

巡礼の様子は『新聞』にも記載されている。それによると、2008 年の移民 100 周年を祝う行事の第一弾として、2007 年 4 月 29 日、30 日に行われた。さいたま、東京、横浜、名古屋、京都、大阪、広島の 7 教区から司牧者と信徒、400 人以上が参加した。一行は長崎平和記念公園、原爆資料館、永井隆資料館、26 聖人殉教地などを巡り、日本のカトリックの歴史について学んだという。そして大浦天主堂と浦上天主堂で両日共にミサが行われた。在日ブラジル人の参加者からは、「迫害を知った今、こうやってイエスに祈ることができることに感謝」、「信仰が深まった」といった声が聞かれた(24)。

翌 2008 年、移民 100 周年に関わる多くの記念行事が、日伯両政府を筆頭とした公的機関、さらには民間団体などを主体として展開された。そしてその一環として 100 年前に日本からの出移民を載せた笠戸丸がブラジルに向けて出航した神戸にて、大規模な「ブラジル移民 100 周年祭」が行われた。そこでは記念にミサが行われたのだが、ミサが行われるためにはカトリック教会から司祭ら司牧者が赴いていなければならない。すなわちこの「移民 100 周年祭」は、カトリック教会の司牧者たちの尽力にも支えられて行われたのである。

「移民 100 周年祭」の主催者は関西の NPO であった。この NPO の設立に深く関わってきた吉富志津代によれば［吉富 2008］、神戸のカトリックたかとり教会を拠点として、吉富とともに外国人子弟教育支援に携わってきた、あるブラジル人女性 M 氏が設立したブラジル人自助組織である。2007 年 11 月から M 氏らは他の市民団体のみならず、兵庫県や神戸市とも協議を続け、無事に移民 100 周年祭が挙行されることになった。イベント自体は 2008 年 4 月 12 日からスタートし、2008 年 4 月 27 日に最終日を迎えた。

写真：2008 年移民 100 周年祭でのミサの様子（筆者撮影）

最終日の記念式典は、メリケンパークでのミサからスタートした。在日ブラジル人信徒は、地元の大阪教区から信徒が参加したほか、さいたま教区ほか在日ブラジル人信徒が多く居住する教区から訪問団が組織され、バス数台に分乗して数百人単位でこのミサに参加したという。ミサを司式した当時のさいたま教区司教で、当時カトリック難民移住移動者委員会委員長であった谷大二は、その説教の中で「多民族・多文化の日本になっていくこと」と「（日本のカトリック）教会は、（外国人信徒によって）信徒数が 2 倍となり、多民族共生の共同体となっている」ことを強調したという。参加したブラジル人たちの声も、『新聞』で紹介されている。たとえば静岡

在住の日系二世ブラジル人信徒は「ここからうちのおやじが、(ブラジルに)行ったんだなあと思って」と述懐している[25]。

シスターA によれば、長崎巡礼を企画・実行したことと、移民 100 周年記念祭へ参加したことの目的は、まずは①在日ブラジル人の多くである、日系ブラジル人の「ルーツ」である日本を確認させるということと、②そのルーツでありホスト社会である、日本におけるカトリックの歴史理解を深めてもらうことにあったという。そして③今自分たち在日ブラジル人が日本にてカトリック信徒として存在する意味を考えてもらう、つまり日本において個人的な信仰が強化されるだけではなく、日本のカトリック教会に信徒として通い、教会の信徒共同体の成員となることを意識してもらいたい、と願っていたという。谷大二が著作の中で「日本人の教会」から「日本にある教会」への変化、ということを述べているが［谷ほか 2008］、日本に自身のルーツを持っている人間が「日本にある教会」の一員となることを、シスターA は企図していた、といえるだろう。

シスターA によれば、彼女に対して「われわれの先祖がどこから旅立ったのか知ることができてよかった」など、感謝の意を示した信徒が多かったという。筆者のインフォーマントの中にも、再度長崎巡礼を行って、日本にて在日ブラジル人信徒として生きる意味をより深く考えるようになった、という人物が存在する。

彼／彼女らに対して、自分の親・祖父母が旅立った場所、同じ信仰を持つものたちが殉教した場所、といった集合的記憶が刻印された場所との邂逅を果たさせることによって、シスターA が目指した目的は一定程度成就したといえるだろう。

6. 「自立性」と「排他性」への対応をめぐって

この時期になると、各小教区での在日ブラジル人信徒共同体が形成されはじめて 10 年近く年月を経ている。これを仮に成熟化と呼ぶのであれば、その成熟化とは「自立性」とも「排他性」とも言いうる性質をともなって果たされてきたように考える。換言すれば「在日ブラジル人」という均一的なエスニシティに根ざした教会内でのエスニック・グループが、成員の

増加、経験の蓄積などによって、自立した信仰を含めた諸活動を活発化させていく時期が、ちょうど2000年代だということができよう。

このような過程において重要な、信仰に根ざした運動として、筆者は2つの事例を指摘したい。すなわち「フェスタ・ジュニーナ」と「カリスマ刷新運動」である。前者は通例ブラジルではカトリック教会の信徒共同体が中心となって行われる、カーニバルとならぶ代表的な祝祭である。後者はアメリカに由来を持つ「カトリックのペンテコステ化」とも捉えうる宗教運動である［Csordas 1997］。

ブラジルでの祝祭というと、知名度が高いのはリオ・デ・ジャネイロで行われるものが特に有名な「カーニバル（謝肉祭）」であろう。それに対して、いわゆる世にいう「収穫祭」として位置づけられるのが、6月末のフェスタ・ジュニーナ（邦訳で「6月の祭」）である。厳密には6月24日、複数の聖人たちを祀るのにあわせて賑やかに行われる［八木谷 2003: 164-172］。宗教的でありつつも世俗的な祝祭とも表現可能である。現在日本の集住地に存在する多くの教会で行われているが、早いところでは1990年代、多くの教会は2000年前後にスタートしたところが多いと見込まれる(26)。

レジーナ・マツエは、フェスタ・ジュニーナ実行過程を在日ブラジル人信徒にとって、日本での種々の剥奪体験を補う、カウンター・アイデンティティとも換言できそうな威信獲得過程であると論じている［Matsue 2006］。筆者も豊橋教会における調査にて、同様に捉えうる傾向を看取している。くわえて筆者は、豊橋教会での調査を通じて、フェスタ・ジュニーナ実行過程とは、威信獲得過程であることに加えて、在日ブラジル人信徒の増加とそれによる信徒共同体の巨大化、信徒共同体内の紐帯強化、そして日本人信徒や他のエスニック・グループとのコンタクト増加による、融和過程であると考えていた［星野 2011］。

このようにマツエや筆者は、主にブラジル人信徒側からの語りから考察を進め、フェスタ・ジュニーナは、在日ブラジル人信徒共同体にとって、成長に向けてのターニングポイントともなりうる、と捉えてきた。ところが司牧者たちは、まったく同じようなまなざしを向けているわけではない。シスターAはフェスタ・ジュニーナにまつわる苦労を、以下のように語る。

フェスタ・ジュニーナをやることはブラジル人側の自信にもなりま

すね。しかし、○○では終わってしまった。しかし、▲▲ではフェスタ・ジュニーナを始めたそう。▲▲には他のところ（＝小教区）からも（応援の在日ブラジル人信徒が）何人も来たんです。フェスタってブラジル人にとって重要……どちらかと言うと、ブラジル人と日本人の間に入って、非常に苦労しました。日本人信徒からは「ブラジル人はいつもうるさいが、フェスタの時はさらにうるさい」と言われ、逆にブラジル人からは「日本人もあんなにお祭りでは賑やかじゃないか。それなのになんで私たちのフェスタを賑やかにやることが許されないのか」と言われていました。フェスタの時はいろんな意味でお互いにうるさいということでした。こうやって間に挟まれるのは日常茶飯事でしたよね……あと、▲▲は教会の周り（＝非カトリックの地域住民）がうるさいんですよ。ちょっと怒って入り込んでくる。フェスタの時は特に危なかったですよ。どこでもそうですが。フェスタの時ほど、周りとトラブルになる可能性が高いですよ（括弧内は筆者による補足。○○と▲▲は小教区名）。

以上の語りをまとめると、①たしかにシスターA もフェスタ実行過程は在日ブラジル人信徒にとっての威信獲得過程であると考えている、②各小教区の状況によって、当然ながらフェスタの消長も存在する、③しかしフェスタの時は、在日ブラジル人と日本人の間のコンフリクトが生成、もしくは潜在的なコンフリクトが顕現する過程でもあり、その間にてコーディネーターのように日本人信徒と在日ブラジル人信徒の間で振る舞う状況にあった、④カトリック信徒ではない地域住民への対応は常に課題であり続けたが、特にフェスタの時はその対応に追われた、となろう。

つまり威信獲得といった信徒共同体の自立性を確立するベクトルをもったフェスタ・ジュニーナの実行過程は、司牧者たちにとっても信徒たちが自立していく過程でもあり、当然ながら歓迎すべきものであった。しかしながら同時に他のエスニック信徒共同体との間に、場合によっては地域住民との間にすら励起しかねないコンフリクトを、どのように回避すべきかといった課題を突きつけられる過程でもあったのだ。

カトリック的な儀礼・教義に直接はかかわらず、しかも聖職者たちが能動的に参加せず、参加者たちはカトリック信徒に限られないフェスタ・ジ

ュニーナに対して、「カリスマ刷新運動」（Catholic Charismatic Renewal, Renovação Carismatica Catolica）は、カトリック教会内において、信徒たちによって創出された、より純粋な宗教運動と目すことができるだろう。「聖霊刷新」・「聖霊による刷新」などともいわれるこの運動が起こったのは、20 世紀中葉のアメリカである。第二バチカン公会議終了の 2 年後、アメリカのデュケーヌ大学にて、カトリック信徒の大学生のグループが、ペンテコステ派の信徒の指導を仰ぎながら、聖霊降誕を体験したことが、カリスマ刷新運動のはじまりと言われている［Csordas 1997］。そして早い段階で、カリスマ刷新運動はカナダ、オーストラリアといった国々とともに、南米のペルー、そしてブラジルに流入していったという［Chesnut 2003］。

ブラジルでは 1980 年代に全国へと広がり、現代的なカトリック信仰の形として、完全にブラジルで定着したと言っていいだろう。同じく第二バチカン公会議後のムーブメントであるにもかかわらず、現在「解放の神学」が低調に推移するのに対して、きわめて対照的でもあるという［山田 2008; Carranza 2000; Carranza and Mariz 2013; Vasquez and Rocha 2013］(27)。

1990 年代後半から 2000 年代頃から、在日ブラジル人たちもこのカリスマ刷新運動の運動を日本で開始させている。具体的には、最初は個人、もしくは小グループでの祈祷会を行いながら、教会内における在日ブラジル人信徒の内での参加者を募り、そして徐々に規模を大きくしていく。やがてその日本におけるカリスマ刷新運動共同体は小教区の枠を越えて集まるようになり、そのメンバーたちが資金を出し合いながら、ブラジルからカリスマ刷新運動共同体に属する司祭、もしくは実践者を呼び寄せて集会を行う、という形へと成長していく。

その由来からして、カリスマ刷新運動とペンテコステ派は近しいものであるが、双方ともにユース・カルチャーと宗教を橋渡しするような「歌」「バンド」「踊り」などショウ的要素を兼ね備え、若者に対して強い凝集力を持つのは、ブラジル本国でも在日ブラジル人でも、同様に見受けられる特徴である。山田は自発的な活動を生みだしやすいのがペンテコステ派の強みであって、カトリック教会においては在日ブラジル人信徒共同体の自発性が、構造上発揮されにくいと指摘する［山田 2010］。しかしカリスマ刷新運動を視野に入れるとき、それはまさに山田がいうような「カトリック信徒の弱み」を克服しうる、信徒側からの自発的な宗教運動であるという点

も見逃せない。

さて、このような在日ブラジル人カリスマ刷新運動が創始され、さらに母国の運動とも連携して日本で活動することによる影響について考察してみよう。たとえば来日が確認された、ブラジル発祥のあるカリスマ刷新運動共同体（以下「C 共同体」とする）は、主に東海地方を中心とした在日ブラジル人信徒たちを中心に受容されている(28)。これらの信徒は総じて「実践者」として、各教会での活動だけでなく、教会をこえたネットワークを構築しているメンバーでもある。これら実践者たちの活動は、各教会や教区の枠を越えており、自立性が高い運動だといえよう。

このような日本における C 共同体の活動について、他の多くの実践者たちは、理解と好意を示し、集会になったらともに参加するのは、ごく自然な成り行きではある。しかしながら、一方で「あれはカトリックではない」、「なぜエヴァンジェリカルの真似事をしなければならないのだ」などとして、忌避する在日ブラジル人信徒の姿があることも忘れてはならない。

カリスマ刷新運動は、在日ブラジル人信徒共同体の自立性を下支えする宗教運動であることは間違いない。しかしながら、モノエスニックな空間の創出に優れ、しかもペンテコステ色の強いこの宗教運動は、在日ブラジル人と日本人司牧者や日本人信徒との分断をもたらす危険性を孕む。さらにいえば、在日ブラジル人信徒共同体内に分断をもたらす可能性すら指摘できるのである。

ではなぜここまでして、在日ブラジル人たちはカトリック内部でカリスマティックな実践を行わなければならないのか。前述したように、自立性が担保された宗教活動を行いたいという欲求がカリスマ刷新運動として表出した、とも捉えられよう。同時にわれわれが注視しなければいけないのは、日本において、母国ブラジル以上にペンテコステ派が支配的な状況である。カトリック人口の減少とペンテコステ人口の増加は、在日ブラジル人カトリック信徒共同体にとって、きわめて重大な問題である。ペンテコステ派教会は、在日ブラジル人にとって自由でエスニックで頻繁に集会を行う。よって在日ブラジル人のカトリック信徒側も、同様な状況を創出しなければ、われわれの信仰共同体が縮小の一途である、という、きわめて強い危機感を共有している。つまり、同じような空間を作り出して、それをもって若者を中心にして、ペンテコステ派への流出を防ぐ防波堤として

位置づけているのである。

しかしながら、この取り組みは諸刃の剣でもある。繰り返しとなるが、カリスマ刷新運動は、その経緯も実践も、カトリック内部でのペンテコスタリズムと考えて差し支えがない。そしてカリスマ刷新運動共同体は、ペンテコステ派からは最初に掘り崩される対象にもなりうるのである(29)。C共同体のメンバー、そして協力する実践者ともに、危険な賭けだと理解しながらカリスマ刷新運動を実行し支えている。

上記のような活動を、日本の在日ブラジル人司牧担当者たちは現場で見つめ、2000 年代半ばから情報として共有していた。このような宗教運動を確認していた司牧者たちはどのような対応をとったのだろうか。これについては、どうやら苦慮していたことが分かっている(30)。信仰共同体側からは、集会が行われる当該地の担当司祭、さらには担当司教への連絡を行い、それを受けて司牧者からの認可を与える、という手続きを踏まえて実行される、といった場合が多いようである。苦慮してきた司牧者側からの対応についても、シスターA による言葉を手がかりとしてみたい。

> （在日ブラジル人をポルトガル語で司牧できる）司牧者の絶対的不足により、集住地域全域での在日ブラジル人信徒をケアすることは不可能です。彼／彼女ら（カリスマ刷新運動参加者）はカトリックの知識もきわめて高く、当然ながら言語的障壁もありません。ポルトガル語しか話せない親世代の司牧、さらにはこどもへの要理教育といった場面で、さらにはポルトガル語のミサ時に神父の説教の代わりに「みことばの分かち合い」をやってもらうといった場面で、彼／彼女らの力は必要です。つまり彼／彼女らが来なければ、ポルトガル語ミサもできない教会があった。結果的にそれが、彼らを排除せず、責任を与え、他人に関わらせながら、個人や仲間だけの信仰世界のみに留まり、結果的にゲットーができてしまうようなことを防ぐことに繋がっていると思いました。

司牧者側も、カリスマ刷新運動についてさまざまな解釈―神学的にその是非を考慮する、または他の信徒への影響について思索をめぐらせる、など―を行い、司牧者それぞれに意見を持っていることが、筆者の聞き取り調査から分かっている。しかしながら、それとはまた別次元で「司牧者の

不足」「司牧が十全に行えるのか」といった問題を考えると、シスターA のいうように、カリスマ刷新運動共同体のメンバーや、実践者の協力なくしては、現実として司牧が不可能なのである。そのような現実を踏まえると、一方で彼／彼女らの「日本でカリスマ刷新運動を展開したい」という要求を拒否することなく、他方では司牧者を助け、そして信徒共同体全体を導くように、彼／彼女らを育成するという選択が必要になってくるのだろう。

特に司牧者側がカリスマ刷新運動に対して不安に考える要素の一つとして、「教会内での私事化」ともいいうる、個人の救済を中心に据え置き、他者との関係を蔑ろにする態度について挙げられる。このような個人重視の態度も、積極的に司牧に関わらせることによって防ぐことができる。

以上のように、一見在日ブラジル人信徒共同体の内部紐帯の強化のみならず、教会内「外部」との接続回路の形成過程として、在日ブラジル人には捉えられがちであったフェスタ・ジュニーナも、司牧者側とっては、常にコンフリクトをいかに回避すべきか、という命題がついてまわる過程でもあった。そしてカリスマ刷新運動については、苦慮しつつも「全面禁止するわけでもなく、責任を持たせ、他者とのかかわり合いを持たせ続ける」という形で、是認する形を取っている。

いずれにせよこれらのエスニックなイベント・集会は、いきおい「自立性」の領域をこえ、他に対しての「排他性」が生まれやすいものであり、したがって当事者（在日ブラジル人信仰共同体）と司牧者の、見解の相違が生まれやすいものである。司牧者にとって、きわめて難しい「舵取り」が要求されてきたといえよう。

7. 2008 年後半から現在まで—不況から減少へ—

2008 年は日本からのブラジル移民 100 周年という、ポジティブな意味でも記念の年であったが、ネガティブな意味、俗に「リーマン・ショック」といわれる不況が、日本の製造業に直撃し、結果として在日ブラジル人の大量解雇という事態が起こった年でも知られることになった。解雇された人びとに対して食料・物資などを無償で渡すような支援は全国、特に集住地の各小教区で行われていた。これは『新聞』でも繰り返し言及されてき

たし、集住地各地における筆者のインフォーマントの多くが指摘する事実である[31]。

そのような中、在日ブラジル人に対して最大の支援を行ったのが、浜松教会での取り組みといえるだろう。この事例については、白波瀬達也と高橋典史によるものにまとめられている［白波瀬・高橋 2012］[32]。困窮する信徒・非信徒たちに食料・物資を支援する試みは、多くの教会で開始され、継続して行われたと思われるが、在日ブラジル人信徒子弟を中心とした大規模な学習支援を行ったのは、管見の限り浜松教会だけである。

白波瀬と高橋は、一連の学習支援をインフォーマントたちの分類にしたがって、緊急的な学びの場を創出する「第一プロジェクト」、日本の公立学校への編入を目標とした「第二プロジェクト」、そしてブラジル帰国後の適応を目標とした「第三プロジェクト」としている。この間実行のための諸資源を、人的資源を中心に多くは教会と信徒に多くを依りつつも、協働した機関からもたらされたことなども、従来は教会内で完結させてきたことを考えれば、画期的といえるだろう。

教員の調達以外は教会内資源のみで完遂させた最後の第三プロジェクトにしても、ブラジル政府から、ブラジル国外でのブラジル人学校の認定を受けての活動である。この時期におけるエスニック・ビジネスの窮状を考える上で、エスニック・スクールたるブラジル人学校ほど適切な事例はない。浜松におけるブラジル人学校の窮状も報道されていた[33]。このカトリック教会における支援は、月謝を払えなくなって不就学に陥ったブラジル人子弟と家庭には教育の場を、ブラジル人学校の縮小に応じて、その職を失っていたブラジル人教師たちに対しては、一時的に職を提供することにもなった。このような事業は地域社会などからも、一定の理解を得ているカトリック教会ゆえに可能だったのだろう、と白波瀬・高橋は考察をしているが、筆者も同意見である。

さて、この浜松教会における教育支援も、最終的には帰国支援化していく。すなわち、2008 年以降現在に至るまで、在日ブラジル人の帰国・減少に、カトリック教会、そして在日ブラジル人信徒共同体も直面している。不況が沈静化した後も、東日本大震災と原発事故の影響もあり、帰国傾向にも歯止めが効かなかったのは前述したとおりである。

在日ブラジル人の減少は、そのまま在日ブラジル人信徒の減少、共同体

の縮小といった事態をもたらすのは論を待たないだろう。実際この時期になると、たとえば小教区ごとの在日ブラジル人信徒共同体では、人員が確保できず、共同体の運営がままならなくなっていくこともある。いくつかの教区を跨がっての信徒共同体活動が増加していく。特に小教区毎のフェスタ・ジュニーナの開催が危ぶまれるようになり、実際に廃止や他小教区との統合、といった事例も散見されるようになる。

在日ブラジル人たち自身による、もしくは在日ブラジル人を信徒の中心としている宗教運動であるペンテコステ派や心霊主義運動にくらべると［星野 2013］、在日ブラジル人信徒の減少が、そのままカトリック教会の存続に大きくは関わらないように思われる。つまり在日ブラジル人にかわって国内外国人数第 3 位になったフィリピン人、さらに近年急激な増加が見られるベトナム人など、他にも日本のカトリック教会に参画していくと考えられる外国人が存在するのである(34)。

司牧者側は、過度に特定のエスニック共同体に関与するのを控える意味でも、この現状を達観しつつ、現在可能で、現場からの要請がある支援と司牧をそのまま継続しているのが現状といえそうだ。これはまた、自然な成り行きによって他エスニック共同体の支援へとシフトしていく過程とも捉えうるだろう。

8. 考察—マルチ・エスニックな教会の中で—

本稿で判明した知見を小括してみよう。まず外国人に対しての「支援」という単語が提示されたときに、想起されるような典型的な支援（医療・教育・仕事など）については、90 年代初頭から行われていたことが判明した。

カナダにて難民支援に出会い、そのまま帰国後に難民支援から活動をはじめた司祭の事例にもあったように、海外における事例などから難民支援の重要性を理解し、支援を行ってきたが、さらにそれが来たるニューカマーの支援にも結びついていった、と理解できる。このような支援の試みはあくまで小教区限定、もしくは司牧者個人・信徒個人や小グループのことが多く、それらが全国区で広範に展開される、といった様相は現在に至る

まで呈していない。しかしながら2000年代に入ると、教区による外国人支援・司牧拠点が機能しはじめ、現在、司牧・支援経験の蓄積、継承といったことが図られるようになってきていた。

しかしながら、司牧・支援環境の整備について万全を期すのは、半ば不可能な試みであったといわざるをえないだろう。たとえばブラジル・カトリック教会の在外ブラジル人司牧担当者とコンタクトを取って新しい人材提供を依頼したとしても、慢性的な在日ブラジル人司牧者不足は解消しえない。

また在日ブラジル人信徒共同体は、ポルトガル語ミサ、もしくは優れたポルトガル語話者が司牧者やリーダーを務めるに生成しやすいのも、司牧者たちが自身の経験則から結論づけている。これについては、実践者以外の多くの在日ブラジル人信徒が持つ「依存的体質」にあるのかもしれない、と指摘する司牧者もいる(35)。いずれにせよ母語によるミサや集いを希求されているものの、各小教区におけるそれら要求すべてに応えることはきわめて難しい。

そしてこのような状況が、カトリックからペンテコステ派への転向といった傾向を生みだしていることは否定できない。ショウジが指摘したとおり、「エスニックな空間」を創出し、「出自が近い人間が牧師」を勤め、「在日ブラジル人達が抱える危機を巧みに宗教的ニーズに結びつける」ことできるペンテコステ派教会では、在日ブラジル人がカトリック教会には望めないことが可能となる［Shoji 2008］。そしてこのような転向する人びとの存在が、カトリック教会内における在日ブラジル人信徒共同体のリーダーたちの危機感を励起させている。

そのような危機感もあってか、フェスタ・ジュニーナやカリスマ刷新運動といった、信徒側からの自発的な運動が活発化していく。在日ブラジル人自身は、フェスタ・ジュニーナの実行過程を、融和過程と目しているが、実はその時司牧者たちは、日本人信徒や他エスニック信徒共同体が抱えた不満の「捌け口」となっていた。カリスマ刷新運動については、信徒たち自身は「ペンテコステ派への防波堤」と目しているのだが、他方、教会内に複数の分断を生成しかねない危険性も孕んでいる。結果として司牧者たちは、その分断の最中にいて、苦慮しながら対応していくことになっていた。このような運動に適宜対処することがブラジル人司牧の局面では求め

られてきたのである。

ポルトガル語ミサが行われるようになり、信徒共同体が形成されていき、さらに自発的な運動が発生した。それらすべての過程によって生み出され、強化された教会内のエスニック・バウンダリーを、在日ブラジル人司牧担当者は越境し、他の司牧者、日本人信徒、外国人信徒といった、教会内の各主体と在日ブラジル人信徒共同体を結びつける役割が求められてきたのである。その働きは、社会関係資本概念を用いるのであれば「チャンネル」・「ブリッジ」と表現可能であろう。

在日ブラジル人司牧者は、このチャンネルやブリッジといった役割をも担う、すなわち在日ブラジル人共同体のリーダーとして、共同体内部ばかりではなく、外部との接続をはかる人材を育てることが重要と考えている。シスターA は以下のようにいう。

> 私はここが宣教の地であり、立派なリーダーを育てることが使命だと思っています。そうやって共同体が 1 つでも多く、日本で成長してくれれば、と考えています。

すなわち、純粋な司牧面における人的資源の不足を、リーダーを中心とした実践者によって補うばかりでなく、教会内における他共同体との没交渉を避けるためにもリーダーたちを育成する必要があるのではないか、ということである。これは結果として、教会に属する者すべてに、歓迎すべき事態をもたらすのではないか、と考える(36)。

9. おわりに—司牧・支援の今後—

2008 年以降、在日ブラジル人が減少し、信徒も減少している現象に際して、信徒共同体が形成できない小教区が見られるようになり、共同体が減少・統合傾向にあることはすでに述べた。相応してポルトガル語のミサも減少しつつある。

この状況は全国の在日ブラジル人信徒共同体に対して、2 つの選択枝を提示しているように考える。すなわち、①「小規模化による他エスニック信徒共同体（特に日本人）への適応」と②「信徒共同体が統合することによ

る共同体の維持」である。

①のような傾向は、たとえば「わたしは〇〇教会の信徒だから」といって、他の小教区にてポルトガル語ミサが行われる日も、居住地の日本語ミサに出席する、といった行為などに現れている。また子弟の日本語スキルが進展し、バイリンガル、もしくは日本語モノリンガルの子弟世代の成長といった現実があり、連れ添った親世代も含めて日本語ミサに出席することも散見されるようになった。これらの行為については「小教区に属すること」を勧める司牧者たちにとって、好適な傾向であることは間違いない。

②についても、マクファーランドがいうところの「気密室」にはポルトガル語話者の神父やシスターが担当することになるのだが、司牧者側の負担は軽減されるし、より細やかに司牧・支援に行うことが可能となるだろう［McFarland 1967=1969］。

ブラジル人の来日が増加して20年をこえたが、いまだにカトリック教会内部では、ブラジル人などの外国人信徒を迎えるべく、さまざまな試行錯誤が続けられている。これを一般社会に簡単に敷衍することは不可能である。しかし、外国人信徒を迎えることの「難しさ」と、迎えた後に見えてくる「可能性」など、われわれがカトリック教会から学ぶことは予想以上にあると考えることもまた、できるのではなかろうか。

註

(1) 『カトリック新聞』はカトリック中央協議会事務局が設ける新聞事業部が発行する週刊誌である。もちろん全国の各小教区での取り組みについて網羅的に記述されているわけではない。しかし、中央協議会や各教区での取り組みについては中央協議会から信徒に向けて発刊されている週刊誌という性格上、よく取り上げられている。また、カトリック中央協議会では毎年9月第4日曜日を「世界難民移住移動者の日」として、「各小教区とカトリックの施設が協力して、国籍を超えた神の国を求めて、真の信仰共同体を築き、全世界の人と「ともに生きる」ための決意を新たにする日」としている（『新聞』2003年10月12日）。そのため、毎年この時期には『新聞』の紙上に大々的に外国人支援・司牧にかかわる特集が組まれる。

(2) 正確な開始時は判明しないが、カトリック中央協議会の難民移住移動者委員会の中に設けられた全国的な意見交換の場であり、90年代から現在まで1年に1回のペースにて行われている。今回2000年代の一部の資料をあるカトリック関係者の好意によって閲覧することが許された。

(3) シスターAは2000年より2012年まで、デカセギをさいたま教区国際交流センター「オープンハウス」と北関東の諸教会にて司牧・支援をしていた、ブラジ

ルへの移民経験を持つ日本人シスターである。シスターB は 2011 年より同様の支援を行っている日本人シスターである。シスターA には 2014 年 8 月 31 日に神戸市内にて、シスターB には 2014 年 3 月 26 日、2014 年 8 月 27 日、2015 年 2 月 24 日にさいたま市内にて聞き取り調査を行った。以下シスターA、シスターB の語りについては、全て上記の調査によっている。

(4) 2016 年 7 月時点で、カトリック名古屋司教・教区長である松浦悟郎が委員長を務めている。

(5) さいたま、名古屋、大阪などの各教区でのヒアリング、また各小教区でのヒアリングなどを通じて、各地域における外国人信徒の数や、諸資源（人的・経済的など）の規模、日本人・外国人信徒双方から求められている必要性などに応じて、各教区一様の対応を取っているわけではないことが分かっている。

(6) 日本カトリック難民移住移動者委員会についての記述は、「日本カトリック難民移住移動者委員会（2015 年 6 月アクセス、http://www.jcarm.com/）」によっている。

(7) 『新聞』1990 年 6 月 3 日号。

(8) 『新聞』1990 年 9 月 16 日号。

(9) 3F（フード、ファッション、フェスティバル）を互いに紹介しあう、といった程度の相互理解しか深まらない「多文化主義」的な態度について、テッサ・モーリス＝スズキは「文化」が本質主義的に捉えられているが故に起こる、皮相的な多文化主義、「コスメティック・マルチカルチュラリズム」であるとして強く批判する［モーリス＝スズキ 2002: 154］。

(10) 『新聞』1991 年 12 月 15 日号より。ちなみにこの教会では 1991 年 12 月 3 日より、ポルトガル語のミサを行うようになったという記述も見られる。

(11) 『新聞』1992 年 1 月 26 日号、1992 年 5 月 24 日号。

(12) K 神父は長崎県五島市出身である。長崎大教区にて叙階された後、名古屋教区に移籍して、長年外国人司牧・支援に携わってきた。東日本大震災後は南相馬市にて被災地支援と司牧に携わっている。90 年代以前から司牧・支援に携わってきた人物の中で、筆者が唯一コンタクトを取ることができた人物が、この K 神父であった。以下、K 神父の語りはすべて 2014 年 9 月 4 日に筆者が K 神父に対して南相馬市にて行った聞き取り調査によっている。

(13) 『新聞』1992 年 1 月 19 日号、1992 年 5 月 31 日号、1992 年 11 月 8 日号。

(14) 「明確なことは分からないが、状況を考える限り、間違いないと思います」というシスターA からの言葉もあった。

(15) 『新聞』1990 年 9 月 9 日号、1994 年 3 月 6 日号、1994 年 9 月 11 日号。

(16) 90 年代当時は司牧に携わっていないシスターB であるが、先人たちから「教区レベルでの組織の活動が各小教区で認められるには、10 年程度の時間が必要であった」と聞いていたという。

(17) 実はこの外国人信徒の総数は、あくまで想定である。これはその地域に住む外国人の総数に、各国におけるカトリック信徒の割合を掛け合わせて算出している。つまりあくまで「想定」であって、各教区で詳しく調査し「実情」を正しく反映した数値を算出しているわけではない。外国人信徒の算出方法について

は、（外国人人口）×（出身国におけるカトリックのシェア）という計算方法にて算出している旨を公表している（『新聞』2003 年 9 月 7 日号）。

(18) 『新聞』2000 年 9 月 24 日号。

(19) 「外登法と取り組む全国キリスト教連絡協議会」（現「外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会」、以下「外キ協」）は、「1980 年代以降、全国のキリスト者が取り組んできた外登法の改正運動を背景に、各地外キ連と教派・団体が 1987 年に結成した全国的協議会である。そして在日韓国・朝鮮人をはじめ、すべての外国人住民と日本人住民との共生社会の実現を教会の宣教課題として取り組み、外登法の抜本改正運動を進めることを目的とした」団体である（「外キ協」HP、http://gaikikyo.jp/modules/pico2/index.php、 2015 年 8 月アクセス）。

(20) 『新聞』2001 年 1 月 28 日号。

(21) 筆者の調査の中で、さいたま教区の新任神父、そして名古屋教区のベテラン神父がそれぞれブラジルに赴いた後、帰国して在日ブラジル人の司牧を担当している。また『新聞』にもその事実を伝える記事が掲載されている。たとえば『新聞』2005 年 7 月 24 日号では、「体験を外国籍信徒の司牧に生かす」として、横浜教区のある神父がブラジルに派遣されたことを伝えている。

(22) 資料「在日ブラジル人司牧者と協力者の集い」より。

(23) たとえば 2006 年から 8 年の間では、ブラジル司教協議会在外ブラジル人司牧担当のアレサンドロ・ルフィノーニ司教が、日本のブラジル人司牧担当者と何度となくコンタクトを取っていたことが分かっている（資料「在日ブラジル人司牧者と協力者の集い」より）。『新聞』紙上では 2001 年 10 月 28 日号では、当時の同担当のラウリンド・グイッツァルディ司教が来日し、在日ブラジル人信徒を慰撫しつつ、日本の各教区において話し合いが行われたことが明らかになっている。また 2006 年 7 月 16 日号にて、当時のブラジル・カトリック司教協議会事務局長であるペドロ・シェーレル司教が来日し、日本のカトリック教会と協議を持ちつつ、在日ブラジル人信徒たちと交流を果たしたことが報告されている。

(24) 『新聞』2007 年 5 月 13 日号。

(25) 『新聞』2008 年 5 月 4 日号。

(26) 『新聞』1999 年 8 月 1 日号、2001 年 7 月 22 日号では、刈谷教会（愛知県・名古屋教区）で 1999 年 6 月 28 日と 2001 年 6 月 24 日に、フェスタ・ジュニーナが行われたことが書かれている。1999 年のフェスタ・ジュニーナですでに「8 回目」であるから、刈谷教会は 1992 年から行っていることになる。ちなみに、刈谷教会の日本人信徒会長に 2013 年 8 月 4 日にインタビューしたところ、「この頃（90 年代から 00 年代前半）は、ブラジル人と交流なんて全くなく」、フェスタ・ジュニーナについても「6 月末に隣でお祭りしている」程度の認識だったという。

(27) 山田は、解放の神学とカリスマ刷新運動の特徴について、以下のような図を用いて説明している。つまり解放の神学は、苦難が社会に外在すると考えて、社会変革をもたらすことに目的があったのに対して、個人レベルの精神的な刷新

をもって、救済とするのがカリスマ刷新運動ということになろう［山田 2008: 40］。

	解放の神学	カリスマ刷新運動
苦難の原因	構造的な要因	個人のエゴイズム
救済をもたらすもの	人的努力	イエス、聖霊
救済の方法	共同体レベルでの政治闘争	個人レベルでの祈り
救済の対象	社会問題（農地改革、土地所有問題、人権問題）	個人の内面（霊的苦悩、精神性）、生活苦

(28) 筆者のインフォーマントによれば、C 共同体は 1994 年、2 人の平信徒によってブラジルで設立されたという。現在本部はサンパウロ州マリリア市に存在する。2016 年現在、年に 1,2 回の頻度で設立者が来日し、在日ブラジル人集住地を巡回しながら集会を行うという。

(29) カリスマ刷新運動に参加している人間（主に若者）をターゲットにして布教するペンテコステ派教会の存在があるという情報を、発表者は在日ブラジル人社会最大のペンテコステ派教会の牧師から得ている。また筆者のインフォーマントの周辺においても、カリスマ刷新運動に熱心に関与していた在日ブラジル人が、実際にペンテコステ派へと転向した。

(30) 在日ブラジル人たちによるカリスマ刷新運動の開始時期を正確に指し示す文献を見いだすことはできなかった。また、インフォーマントの語りからも「開始の頃の様子は分からない」といった答えしかえられなかった。成立過程、成長過程の究明については、今後の課題としたい。ただし、資料「在日ブラジル人司牧者と協力者の集い」2004 年版に載せられた、ある在日ブラジル人司牧者の言葉によれば、「（在日ブラジル人によるカリスマ刷新運動は）日本の教会とのつながりを持つためのパイプ役を務めるリーダーがいないために、孤立した教会をつくっている。（在日ブラジル人カリスマ刷新運動のリーダーは）ブラジルから直接に、（カリスマ刷新運動共同体の）リーダーを招待して、他の教区の信者を招いて大がかりなセミナーや黙想会などを行い、教区の司牧活動とは平行線を保っているので、非常に大きな困難が生じている」とあった。また『新聞』2005 年 10 月 23 日号においては、2005 年に名古屋にて行われた集いでも、カリスマ刷新運動に対する対応に司牧者たちが苦慮している現状が報告されている。

(31) 『新聞』2009 年 1 月 18 日号では、浜松教会（静岡県・横浜教区）と深谷教会（埼玉県・さいたま教区）での事例、同 2009 年 4 月 9 日号では高田教会（新潟県・新潟教区）、同 2009 年 5 月 31 日号では太田教会（群馬県・さいたま教区）での支援の様子が描き出されている。

(32) 白波瀬・高橋［2012］のもととなった調査については、筆者も一部同行・参加している。

(33) たとえば『静岡新聞』2009 年 4 月 23 日号には、「「外国人学校に支援を」関係者、窮状訴え」といった記事がある。

(34) もちろんこれは在日ブラジル人信徒の減少によって、カトリック教会が在日ブラジル人信徒への支援・司牧について軽視しつつある、ということではない。

(35) この「何でも他人がやってくれるだろう」とする「依存的体質」を、子弟教育の場における在日ブラジル人の非積極的な態度の中に見いだした研究も存在する［渡辺ほか 2000］。
(36) 本稿を著すための調査中、日本人信徒から「高齢化してしまった教会を支える若い人は、これからは外国人信徒なのかも知れない」といった趣旨の語りが、複数回得られた。このことについては、また別稿を設けて論じたい。

参考文献

Carranza, B. 2000 *Renovacão Carismatica Catolica: Origens, Mudancas e Tendencias.* São Paulo: Editorial Santuario.

Carranza, B. and Mariz, C. 2013: "Catholicism for Export: The Case of Canção Nova," C. Rocha and Manuel A. Vasquez, eds., *The Diaspora of Brazilian Religions,* Leiden: Brill.

Chesnut, R. A. 2003 *Competitive Spirits: Latin America's New Religious Economy.* Oxford: Oxford University Press.

Csordas, T. 1997 *Language, Charisma, and Creativity: The Ritual life of a Religious Movement.* Berkeley: University of California Press.

樋口直人 1998 「在日ブラジル人と日系新宗教」『一橋研究』23(1) 一橋研究編集委員会。

星野壮 2011 「在日ブラジル人カトリック信徒の共同体について―豊橋市の事例より―」『宗教学年報』26 大正大学宗教学会。

星野壮 2013 「日本に居続けることの意味―在日ブラジル人聖職者たちの語りより―」『宗教学論集』32 駒沢宗教学研究会。

McFarland, H. Neill. 1967 *The Rush Hour of the Gods.* （＝内藤豊、杉本武之訳 1969 『神々のラッシュアワー』、社会思想社。）

Matsue, R. 2006 *Religious Activities among the Brazilian Diaspora in Japan: The Cases of the Catholic Church, Sekai Kyuseikyo and Soka Gakkai,* Ph. D. Dissertation to the Graduate School of Humanities and Social Sciences of University of Tsukuba.

モーリス＝スズキ、テッサ 2002 『批判的想像力のために』平凡社。

長崎巡礼センター編 2008 『ザビエルと歩くながさき巡礼―巡礼地案内マニュアル―』 長崎文献社。

Quero, H. M. C. 2007 「Worshipping in (Un) Familiar Land: Brazilian Nikkeijin migrants within the Roman Catholic Church in Japan」『Encontros Lusofonos』9 上智大学ポルトガル・ブラジル研究センター。

白波瀬達也・高橋典史 2012 「日本におけるカトリック教会とニューカマー」三木英・櫻井義秀編著『日本に生きる移民たちの宗教生活』 ミネルヴァ書房。

Shoji, R. 2008 "Religioes entre Brasileiros no Japao: Conversão ao Pentecostalismo e Redefinicao Etnica," *REVER*, 8. Pós-Graduação em Ciências da Religião - PUC-São

Paulo.
谷大二ほか 2008 『移住者と共に生きる教会』 女子パウロ会。
Vasquez, Manuel A. and Rocha, C. 2013 “Brazil in the New Global Cartography of Religion.” C. Rocha and Manuel A. Vasquez, eds., *The Diaspora of Brazilian Religions,* Leiden: Brill.
渡辺雅子 2001 「在日日系ブラジル人信者への新宗教の対応―天理教と創価学会の比較」『明治学院大学社会学部付属研究所年報』31、明治学院大学。
渡辺雅子・石川雅典・小嶋茂・小林本多ちえみエレナ 2000 「在日ブラジル人児童生徒の教育の実態と課題」『研究所年報』30、明治学院大学社会学部付属研究所。
渡辺雅子・田島忠篤・石渡佳美 1999 「創価学会在日ブラジル人メンバーの組織化と生活実態・信仰活動」『明治学院論叢 社会学・社会福祉学研究』104、明治学院大学。
八木谷涼子 2003 『キリスト教歳時記 知っておきたい教会の文化』 平凡社。
山田政信 2008 「カリスマ刷新運動―プロテスタントの伸展に抗うブラジル・カトリック教会―」『ラテンアメリカ・カリブ研究』15 つくばラテンアメリカ・カリブ研究会。
山田政信 2010 「在日ブラジル人の宗教生活」駒井洋監修『ラテンアメリカ・ディアスポラ』 明石書店。
吉富志津代 2008 『多文化共生社会と外国人コミュニティの力―ゲットー化しない自助組織は存在するか？―』 現代人文社。